

運営に関わって

沖田 喜一

国立天文台岡山天体物理観測所・主任研究技師

おきた・きいち / 1967年東京大学東京天文台岡山天体物理観測所に入台。観測所共同利用業務を遂行しながら、各種の観測装置開発に従事。1989年から13年間すばる望遠鏡建設に従事。2002年岡山天体物理観測所に戻り、観測所運用に従事しながら、京都大学3.8m新技術望遠鏡の建設に参加中。2010年岡山天体物理観測所の50周年記念事業を副所長として完遂。2004年度から4期8年国立天文台技術検討委員会委員、2006年度から2011年度までの4年間国立天文台幹事会議委員。



2010年度から3年間、分子科学研究所装置開発室の外部運営委員をさせていただきました。研究分野が大きく違う研究所の運営に関して、まったく分野外の自分が、このような役目を引き受けてよいものかと悩みましたが、まあ技術関連のことなら何とかかなるかと思ったのは事実です。2004年度からの法人化に伴い、分子研を含む岡崎3研究所と核融合研、国立天文台の5研究所が突然親戚関係になりました。まったく分野違いなので、「研究者の共同研究は難しいが、そこで働く技術者間では何かしら共通点があるのではないか」、「皆さんどんな業務をしているのか」という思いからお互いの交流を図るため、機構技術研究会を2006年に立ち上げました。そんな背景から、何となく「親戚のお役にたつのでは」という思いもあり引き受けました。法人化後国立天文台はプロジェクト制を採用していることもあり、プロジェクトの大枠の中で協議・運営を行うスタイルを採っています。従って、この規模（失礼）で外部の委員を含めた委員会で運営を議論することに、すごいなーと新鮮に感じました。最初は議論の背景がよく解らず的外れの意見を述べたのではないかと反省しています。装置開発室は、施設利用の支援、中高生の職場体験、イベントへの参加等多岐にわたって活動している様子を知り、頑張っておられることを感じました。しかし、2010年の

Annual Reportの序文に宇理須先生が述べられているように問題もあると感じます。言われたものを言われるままに製作することは金さえあれば全て外注できます。研究所の技術職員は、研究に一番近いところで、「何が必要か」という分析と「どうすればそれを実現できるか」という現場にいるわけで、そのことについての「ひらめき」が重要だといつも感じています。技術と一言で言ってもかなり広い意味があります。最先端の技術を真に開発するのは、柔軟な組織・潤沢な経費が必要なのは言うまでもありませんが、我々の現場ではなかなかそうはいきません。言うまでもなく「より安価で効率的な方法」を探る必要があります。そのような状況を作るためにも、構成員全体で、開発されたものをうまく運用する基盤の技術を忘れてはならないと思います。ちゃんとした基盤技術に支えられて初めて先端技術が花開くと思います。共同利用機関としての装置開発室の意義はその辺りを十分意識して運用することが肝要です。ともすれば、「装置開発」という心地よい言葉だけが先行し、全員がそれに向かってしまうと、通常の共同利用に支障が出てくることもあります。この辺りのバランスは必要です。開発業務の形態はともすれば研究者と1対1の関係が出てくるように感じます。開発室のメンバー複数の人がそれに携わる形も必要ではないでしょうか。国立天文台でも東京

天文台時代に行われていた講座制の名残もあり、先生が退職されると担当技術職員はその後何をすれば良いのか路頭に迷う(?)状況もありました。そのようなことを避けるとともに、今後の必要技術と位置付け及び技術職員の働き方を委員会等で議論検討してきました。その中で、プロジェクトのメンバーが「グループとして業務にあたる」ことが重要だと認識し、そのような業務形態に移行しつつあります。分子研でも開発室のメンバーが、専門性の部分は保持しながら、他の技術にも基盤的には共有するレベルを維持することが肝要かと思います。開発室全体として関わっている（専門技術分野の人のみという意味ではなく）という意識が、開発室全体のモチベーション向上になるのではないかと考えます。もちろん超専門性の部分はアウトソーシングに委ねることはしかたありません。全体のスキルアップを図り、そのうえで優秀な職員はそれなりの評価を行うことはもちろん重要です。運営委員会でも、装置開発室が如何に在るべきかを真剣に議論されていると感じます。所属されている技術職員のモチベーションを上げていくにはどのような形態が良いのかなど「将来技術開発プロジェクト」と位置付け推進しようとしていることは重要であると思います。今後、装置開発室が「期待される場所」として大いに発展することを祈っています。